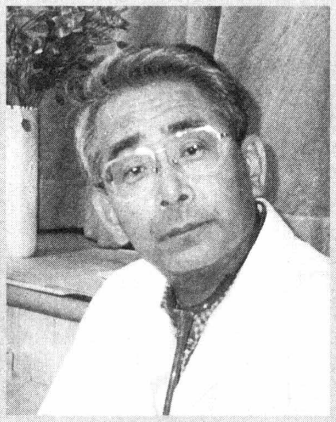
徘徊おもらし、無表情うつ症状を伴う ボケ、パーキンソン病 脳梗塞が大軽快

大豆で作った

脳活性食品

薬学博士・平田五一先生



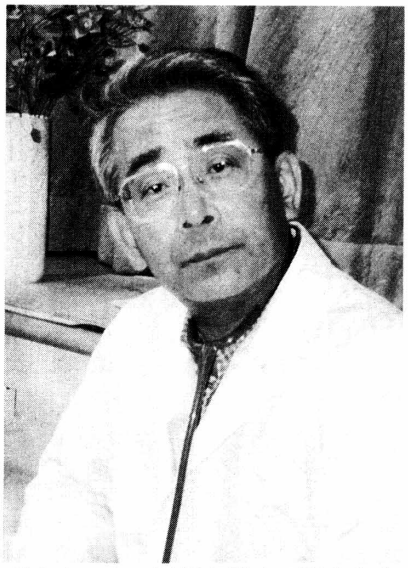
東成病院副院長・野中志郎先生

老人ホーム看護婦長・出口多摩子さん

①脳機能を活性化してボケ症状やパーキンソン病を撃退すると判明した大豆の成分……210
②大豆の活脳性成分がアルツハイマーなどのボケやうつを軽快した実験結果を紹介……212
③表情も気力もなかったボケ患者が脳活性食品で笑顔と意欲を取り戻した例を報告……214
④特養老人ホームでは脳梗塞の後遺症やアルツハイマーに脳活性食品が威力を発揮……216
⑤重度痴呆だった母が脳活性食品で徘徊しなくなり会話や状況もわかるほどに回復……218
⑥パーキンソン症候群の主人が脳活性食品を飲んだら体の硬直や極度の便秘が軽快……220
⑦脳梗塞の後遺症という主人の嚥下障害とボケが脳活性食品で劇的に改善して驚嘆……222
⑧脳活性食品を飲んだら活力があふれ毎月襲われた悩みのぜんそくも消失し大喜び……224
◎脳活性食品をプレゼント……213

表情も気力もなかったボケ患者が脳活性食品で笑顔と意欲を取り戻した例を報告

東成病院副院長
野中志郎（のなかしろう）


老人ホームの医師も務める野中先生

入院や不幸などがきっかけでボケる

私は病院の副院長をしながら、私の友人の経営する特別養護老人ホームの管理医師をしています。その老人ホームの入所者の八割以上は、程度はさまざまですが、ボケ（痴呆）の患者さんで占められています。

一方、私が勤める病院でも、最近は患者さんの年齢層が徐々に変わってきて、とくに入院患者の高齢化が見られるようになりました。そういう人たちは、いったん入院するとなかなか退院できません。こうした状況では、やはりボケという問題が切実なものとなってきます。

たとえば、高齢者が、骨折などの理由で長期入院したとしましょう。すると、人が変わったようにボケてしまうことがめずらしくありません。ベッドで安静にして、長い間じっとしていると、入院前はしっかりしていた人でもボケやすくなるのです。

また、高齢者は、ストレスにも弱くなります。同居している娘に先立たれるといったような、身近な人の不幸などをきっかけに急にボケるという例は、とても多いものです。

もちろん、私も医師ですから、そうした患者さんのボケをなんとか改善しようと、これまで努力をしてきました。ボケの新薬が出れば、すぐに試したものです。しかし、さまざまな薬を使ってはみたものの、芳しい効果のある薬は一つもありませんでした。

また、薬によっては、高齢者に処方するさいに注意を必要とするものもあります。ボケの患者さんはうつ症状も呈しますが、そのうつ症状を一時的に悪化させてしまうような薬もあるからです。

ところが、私の認識を一変させるようなことが最近起こりました。医薬品ではありませんが、ホスファチジルセリン（略してPS）という大豆から抽出した栄養素が、画期的なほどによく効いたのです。

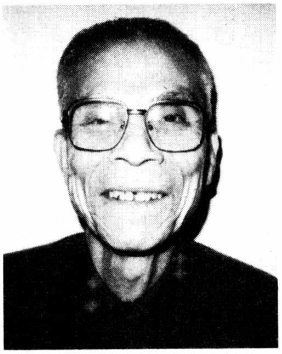
昨年の春、知人からソフトカプセルの脳活性食品を紹介されました。これは、一粒にPSが五〇ミリグラム入っているというもので、多数の実験や研究で脳機能の高まることが裏づけられているといいます。欧米では、ボケやパーキンソン病などの、脳に原因のある病気の治療に役立てているとか。

実際のところ、効果に対して私は半信半疑でしたが、私の病院の患者さんに、同意を得たうえで飲んでみてもらうことにしました。

※記事についてのお問い合わせは
編集部（☎03-3818-1251）まで

飲み始めて二週間で改善効果が現れた

河重幹雄さん（七十五歳）は、見た目にはなんの異常も感じられませんが、家にいるとボーッとして何もしないと奥さんがこぼしていました。以前は活発だったのに、退職後はすっかり変わって、部屋に閉じこもるようになったともいいます。


明るくなった河重さん

記憶障害もあるといいますから、ボケの初期といったところでしょうか。

そこで、とりあえず毎日、脳活性食品を六粒ずつ飲むように指示しました（脳活性食品の基本的な飲み方は二一二～二一三ページ参照）。

すると、飲み始めて二週間ぐらいで変化が現れてきました。まず、家でゴロゴロする時間が少なくなりました。しかも、表情が明るくなって笑うようになり、積極性が出てきました。たとえば、奥さんが庭仕事を始めると、それを手伝うほど意欲的になったというのです。

さらには、新聞を読むようになり会話もふえていったそうで、一ヵ月ほどの間に、どんどん活動的になっていったと奥さんは話してくれました。私にとっても、まったく信じられないほどの効果です。

また、一ヵ月後からは、脳活性食品の飲む量を一日二粒にへらしましたが、それでも効果は持続しているようです。

そこで、ただちに老人ホームでも脳活性食品を試してみることにしました。すると、やはりホームの入所者にも改善が見られました。その様子は、ホームの看護婦長である出口多摩子さんが二一六～二一七ページで報告しています。やはり、無表情だった顔に表情が蘇って笑うようになったとか、積極的になったという例が紹介されています。

ボケてくると、顔が無表情になり、楽しさも悲しさも表現できなくなってきます。それだけ脳での情報量が少なくなり、脳の機能が低下していることが外見からもわかるのです。脳活性食品を用いていちばん感じることは、そうした患者さんの顔に生きている実感のようなものが現れてくることでした。

しかも、脳活性食品は副作用がありません。脳活性食品は、今後のボケ治療を明るくするものだと自信を持っておすすめできます。